

第28話 伝教大師と弘法大師

ぶつきょう

仏教は、奈良時代までは大陸から伝わって来たままの物でしたが、

平安時代に入ると、全く日本化して、日本人の仏教となった。

この新しい仏教を大いに弘めたのは伝教大師と弘法大師です。

へいあん

平安時代の新仏教

仏教は奈良時代に聖武天皇が盛んにお弘めになったために、殆ど全国に行き渡って、国毎に国分僧寺や国分尼寺が建てられたりしたほどです。しかし、其の頃の仏教は、大陸から伝わって来たままのものであって、昔から在るわが国の神道や、早くから輸入されて来ている中国の儒教などとは調和しないところもあったために、広く一般の人々の間にはまだ深く信じられていませんでした。

ところが、平安時代に入ると、伝教大師と弘法大師という二人の偉い僧侶が現れて、よく日本の国体とも合い、日本人の性質ともあうように仏教を日本化して、盛んにそれを説き出したために、朝廷のご信仰も得て、一般の人々の間にも広く行われるようになって行きました。

最澄の生立ち

伝教大師は近江国滋賀郡の人で、幼名を広野といいます。十二歳のときに出家して名を最澄と改め、奈良の大安寺の行表という和尚の弟子となって、熱心に仏教を修業した。

しかし、凡そ学問というものは、深く学べば学ぶほどむづかしくなっていて、疑問も出てくるものですから、最澄も、十九歳の頃には、仲間の僧侶らよりは図抜けて出来るようになったものの、分からぬことも多く生じて来ました。

それで、この上にも大いに勉強しようと思い、それには人のいない静かな処が良いと、故郷のうしろに聳え立っている比叡山の森の中に小さな小屋を造った。そこで、更にむづかしい経文を研究し続けていたが、三年の後に、彼は山の上に小さな寺を建てて、自分で刻んだ等身の薬師仏をそこに安置した。

これが有名な比叡山延暦寺の起こりです。実に延暦7年のことで、ちょうど桓武天皇が長岡の京をお造りになっておられた時です。



伝教大師

この寺はいかにも小さかったが、最澄がすぐれた僧侶であるということは既に世に聞こえはじめていましたから、次第に四方から人々は集まって、彼に教えを請うた。けれども、最澄は少しも偉そう

第28話 伝教大師と弘法大師

な顔をしないで、その研究をつづけました。

彼のこの篤学が、ついに延暦16年に桓武天皇のお耳に達して、内供奉に列せられた。内供奉というのは、朝廷で国内から広く選んだ十人の高僧のことで、内道場（内裏に設けられた道場、即ち仏の道を修める所）に供奉するので、この名があります。

最澄、唐に渡る

しかし、最澄は自分の修業している仏教の中に、まだまだ不審のことが少くなかったもので、更に一層熱心に研究をつづけていると、延暦22年に遣唐使を出されるのに当たって、桓武天皇はかれを留学僧として唐に渡らせることとされました。唐に渡れば、不審なところを明らかにすることも出来るのですから、最澄はどんなにか喜んだでしょう！

彼は遣唐大使藤原葛野麻呂、副司石川道益らの一行に随って、難波（大阪）から船に乗った。しかし、その時は途中で暴風雨に遭って難船したので引返して、次の年の3月に再び出発しました。後に弘法大師となった空海も一緒にでしたが船はちがっていた。遣唐使の船は例の四艘の定りであって、空海は大使と共にその一船に乗り、最澄は別の船に判官の菅原清公と一緒に乗りました。

今度も途中で暴風に遇って、他の船とは別々になったが、それでも9月の上旬に、漸く明州という港に着きました。嘗て安倍仲麻呂が唐人と別れを惜しんだ際に、月を眺めて、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」という有名な歌を詠んだところでした。

天台の教を学ぶ

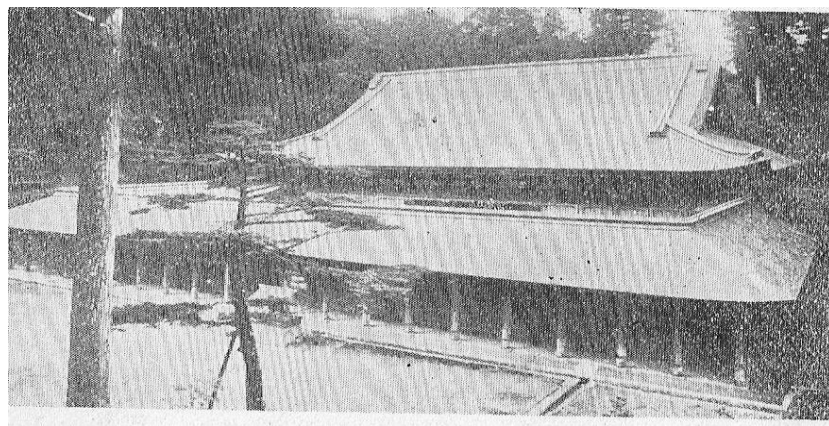
さて、最澄は明州に着くと、唐の都には向かわずに、そのまま天台山国清寺へ行って、座主の道遂和尚に逢いました。この天台の教を学ぼうとするのが彼の目的であったからです。道遂和尚は宗祖天台大師から七世の嫡孫で、そのころ最も世に聞こえていた高僧でありましたが、最澄の望みを聞くと、喜んでその宗門の深い教を伝えました。

その後、最澄が仏龍寺の行満和尚のところに行くと、この和尚もまた非常に喜んで、「昔、天台大師は、自分の死んだ後二百余年になると、自分の教えは必ず東の国に伝わるであろうといわれたが、そのお言葉がぴたりと中った。あなたこそこの宗門を日本に伝えるお方である」といって、貴い経文やその注釈書などを悉く最澄に授けた。

しかし最澄は、その上にもなお方々の名僧を訪ねて、教えを受けたり、新しい書物をみると、それを写したりして、天台、法華の深遠な教えから、真言秘密の法や禅の事まで残りなく勉強して、翌24年に、遣唐大使の一行と共に帰朝した。この時、彼が持ち帰った書物の中には、これまでわが国に伝わらなかった新しい経文や何かが非常に多かったということです。

てんだいしゅう
天台宗を開く

中国から帰ると、最澄はまた比叡山に登って、その新しい天台の教えを説き出したが、この時、彼の伝えた天台宗は、中国にて行われていた純粹の天台宗のままではありませんでした。



滋賀 延暦寺の根本中堂

彼は日本にこれを弘めるのには、日本の国風に合うようにしなければならないと考えて、大いにこれを日本化したのでした。これがために、殊に世間の評判も高くなって、その教えを信ずる者が日増しに多くなって来た。従って寺もだんだん大きくなり、山の上にも、谷の間にも、盛んに堂や塔が建てられたりして、人の往来も繁く、曾ては鳥や獣の棲家であった山の中が、叡山三千坊などと言いはやされるほどに開けて来ました。

さいちよう がくしき
最澄の学識

初めは気にも留めなかった奈良の諸大寺の僧侶らも、この新しい天台宗が斯うしてますます盛んになるのを見ると、自分らの勢力がそれだけ縮められることになるのですから、大いに驚いて、俄かにあわてふためいていました。しかし、殆ど底のしれないほどにも深く研究して来た最澄の学問に対しては、迎も敵しようがなかったもので、これをどうすることも出来なかった。彼らは黙って見ているより外はなかったのです。

実際、最澄が唐にいたのは僅かに一年にも足りなかったのですが、その学問の博く且つ深かったことは、実に驚くばかりで、凡そ仏教のむづかしい經典という經典は、大抵、此の間に彼が集めて来ていました。それでその後、苟くも仏教を研究しようとするほどのものは、一度は必ず比叡山に登って、これらの經典に就いて学ばなければならないとまでいわれたのであります。

えんりやくじ
比叡山延暦寺

桓武天皇は先に王城の鎮護として、羅生門の東と西に東寺と西寺をお建てになったが、今や最澄の学問を大いに重んぜられて、ちょうど比叡山が王城の鬼門（東北の隅のことで、昔は、この方位を犯すと災害があると信じられていた）に当たっているのです、彼の寺を鬼門の鎮護として朝廷のために御祈禱を命ぜられ、又、比叡山を天台宗の本山として寺号を延暦寺と賜りました。

嘗て二十二歳の青年僧が独りで勉強するために建てた山寺が、まだ20年と経たないうちに、王城の鎮護となったのです。何という名誉な事でありましたでしょう！

最澄はまた諸国をめぐる、広く人々の間に天台宗を弘めたが、行く先々で世間の為になるようなことを多くしました。美濃から信濃へ赴く山中には、険しい道が長く続いて、一日歩いても泊まるべき人家

のあるところまではまだその半ばにしかならないようなところがあったが、彼はその中間に一寺を開いて、
一般の宿舎となし、旅人の便を計りました。これなぞは其の一つです。

かくして最澄は、その学識の高いのを以って殊に上下の篤い信仰と尊敬とを集めていましたが、嵯峨
天皇の光仁 13 年について 56 歳で亡くなりました。天皇は深く惜しまれて、次の年に延暦寺の勅額を
比叡山に賜ったが、後に第 56 代清和天皇は特に伝教大師と諡せられた。これがわが国での大師号の
始めであります。

この伝教大師が天台宗を伝えたのに対して、初
めてわが国に真言宗を伝えたのが弘法大師です。

前にも少し述べたように、二人は同時に唐へ渡っ
たのですが、その就いた師匠もちがえば学んだ教えも
ちがい、帰朝したのも一緒ではありませんでした。

くわかい おいた 空海の生立ち

弘法大師は讃岐国（香川県）多度郡屏風が浦の
人で、幼名を眞魚といました。生まれつき大そ
う賢く、どこか普通の子供とはちがった気高いところ
があった。5、6歳のころには、常の遊びごとにも
粘土で仏像を作り、これに花を上げて喜んでいたと
いうことです。



弘 法 大 師

18歳の時に都にのぼり、大学に入って専ら儒教を学んだが、もともと仏教を修めて、大いに世の為
に尽くそうというのが其の望みであったのですから、ついに19歳の時に、奈良の石淵寺の勤操法師の弟子
となって、無空と名告り、更に3年の後に、東大寺に入って名を空海と改めた。時に延暦14年、彼が
22歳の時でありました。

くわかい どう わた 空海、唐に渡る

空海は、その後はいよいよ修業を積んで、仏の道を明らかにしようと力めました。彼が最も重き
を置いた経文の中にもいろいろと分かり兼ねるところが出て来て、しかも、それらの疑問に就いては、わ
が国には教えを受けるべき人がいなかったの、どうかして唐に渡って、深く研究したいと思っていま
した。

この学問に熱心であるということが、桓武天皇のご信任を得る本となって、たまたま延暦 22 年に
遣唐使を出だされることになった時に、彼もまた最澄と同じく、選ばれて留学僧となったのです。
この時の遣唐使の船が暴風雨のために一度は引返して、その翌年に再び出発したことは前にも述べまし
た。今度もまた暴風に遇いましたが、空海らの乗った船は、34 日の間を海に泛んで、漸く 8 月に福州
という港に着きました。

第28話 伝教大師と弘法大師

真言の教を聴く

彼は大使藤原葛野麻呂らと一緒にその年の12月に唐の都の長安に赴き、名高い僧侶や学者を訪ねて、教えを聴いていたが、其うちに、其ころ真言宗第一の高僧といわれた清龍寺の恵果和尚に逢いました。

其の時、恵果は62歳で、空海は32歳でしたから、年からいうと、親子ほどもちがったのですが、二人は初めて逢った時から、まるで長い間の親しい友達であったように、よく気が合って、教えられる者はもとよりですが、教える者も非常に力を入れて、一緒に研究したので、わずか数ヶ月の間に、空海は真言宗の教義や秘法を悉く学んでしまうことが出来ました。

恵果が真言秘密の法を残らず空海に伝えた時に、それを知った中国のある坊さんが、「中国の者で多くの弟子がいるのに、なぜ日本の僧などに秘法を伝えるのです？」と咎めるように言って訊くと、恵果は、「仏の道に国の内外はない。すぐれた者に伝えるのが当然である」といって叱りつけたということです。これを見ても、いかに空海がすぐれて偉い人であったかが分かります。

彼はまた、恵果和尚が間もなく亡くなったために、その後は印度から来た名僧を訪ねて、その人から華嚴や真言秘密の深い教えをうけたが、なおその外にも、医薬や工芸の事をも学び、殊に、書は韓方明という先生に習って、非常に上手に書きました。

真言宗を開く

空海は、初めは十年以上も中国にいるつもりで出かけたのですが、意外にも早く研究が出来てしまったのと、一つは、恵果和尚が亡くなる時に、早く日本に帰って真言宗を弘めてくれるようにと、くれぐれも頼んで行かれたのとで、最澄よりは一年おくれ、出発した時から三年目に、早くも日本に帰って来ました。

しかしその時は、桓武天皇は既にお崩れになって、平城天皇の御代でした。天皇は空海を宮中にお召しになって、その研究して来たところを具さにお聴きになり、今までの教えと全くちがった深い趣のあるのを知られると、非常に興味を持たれて、大いに天下に真言の教えを弘めるようにと仰せられた。

それで、空海が熱心にその教えを説き始めると、ちょうど其の頃は最澄がさかんに天台の教えを説いて、延暦寺の勢力が大いに高まって来ていた時でありましたから、奈良の諸大寺の僧侶らは、この上にまた新しい真言宗を弘められたのでは、いよいよ自分らの勢力が狭められることになろうと思い、空海の説く真言秘密の教えは全く邪道であるといっ、しきりに彼を罵りました。

空海、諸宗の僧侶を説破する

次の嵯峨天皇は、この罵る声の次第に高くなるのを聞かれると、ある時、空海と共に諸宗の僧侶らを宮中に召されて、宗旨の議論をさせられた。その時、空海は促身即仏（この現在の身のままで直ちに仏になること）の真理を説いたが、その議論がいかに精しく、筋もよく通り、弁舌も爽やかで、そこに一点の疑いを挟む余地も無かったので、誰も皆ちっと耳を傾けたまま、感服させられて、一人として

これに反対する者などいなかった。のみならず、中には今までの自分の無知無学を悟って、空海の弟子となった者も少なくなかった。それからは天皇のご信任はいよいよ厚く、世間の人の信仰はいよいよ深くなりました。

仏教の日本化

空海の説いた真言宗が、中国で行われていたままのものではなかったことは、ちょうど最澄の天台宗が中国の天台宗のままでなかったのと同じです。彼もまた最澄と同じように、日本の固有の道徳と仏教の真理とを一つに結びつけて、全く日本の国風に合うような宗教としたのです。また、彼は儒教やその他の教えも巧みに取入れ、仏寺に守護神として神社を祀って、わが神道との調和をも計りました。

本地垂迹の説

これは、神と仏とは決して別のものではないという考えから起ったことで、この考えは、多少は既に奈良時代から行われて来ていたのですが、空海や最澄が日本化した新しい仏教を説くに至って、更に一層明らかにされたものでした。

また、これが後に、神の本地は仏で、神は仏が権りに人間界に現れたものあるから、わが国の神々も、其の源を尋ねれば、皆、菩薩であるという、所謂本地垂迹説となって、大いに世人の信仰を深める本となりました。

金剛峰寺を建てる

さて空海は、初めは京都高雄の神護寺で教えを説いていました。弘仁七年、嵯峨天皇から紀州(和歌山)の高野山を賜って、そこに新たに金剛峰寺を建てて、真言宗の本山としました。

高野山は、遠く世間を離れた静かな所で、心を静めて仏教を研究するのに最も適していたので、大いにこれを究めようする人々は、次第に多く集まって、空海の教えを受けました。

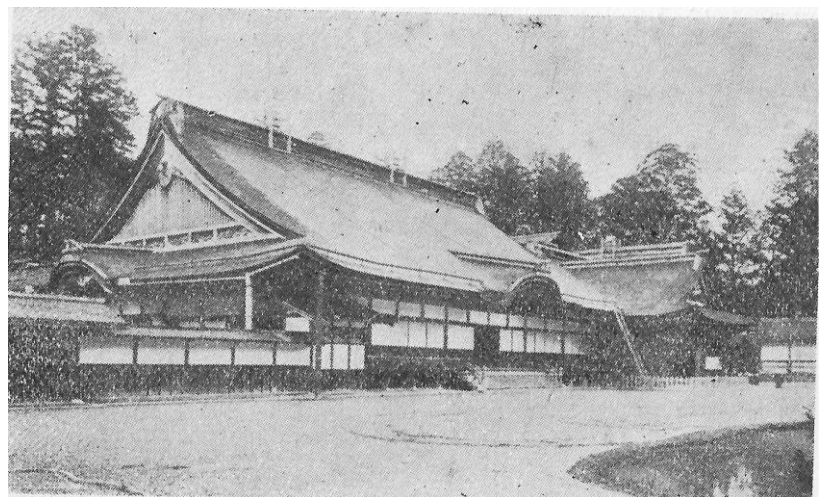
しかし、都からは二十里(1里は4km)以上も離れたところですので、空海を最もご信任になっておられる

天皇は、絶えずお召しになることの

出来ないのを淋しくおぼしめして、特に羅生門の東の東寺を空海に賜り、都近くの真言宗の本寺となされた。

東寺を賜わる

この東寺は、今も元のところ(京都駅の南西)に在って、毎年、宮内省から天皇陛下のお召しになる御衣



和歌山

高野山

金剛峰寺

第28話 伝教大師と弘法大師

を送ってご祈祷させるので有名です。 次の第53代淳和天皇も、第54代仁明天皇も、等しく空海を尊信せられたが、殊に仁明天皇は宮中に真言院を置かれて、空海に天下泰平の祈祷をおさせになったほどでした。

既に朝廷の信任がこういう風に篤かったものですから、役人らはいうまでもなく、一般の人々も進んで空海の教を仰いで、真言宗は広く天下に弘まるようになって行きました。

空海の能書

空海は、初めて真言宗を弘めて世の人を教え導いたばかりでなく、又、中国の学問にもすぐれ、文章も上手な上に、絵や彫刻も巧みで、殊に書は、前にも少し述べたように、非常に上手でありました。

それで、その頃の書の名人であった嵯峨天皇及び橘逸勢と共に、日本の三筆と称せられたのですが、とりわけ彼に就いては、「弘法筆を選ばず」とか、「弘法にも筆のあやまり」とかというような諺も世にあるくらいで、さまざまな逸話が伝えられています。

嘗て中国にいた時に、唐の天子の仰せを受けて、或る宮殿の壁に文字を書くのに、五本の筆を口と左右の手足とに執って、飛びついて一度に五行に書いたので、五筆和尚という名を賜ったという話もあります。

又、帰朝してから、平城天皇の御代に、御所の応天門の額を書きましたが、その額を門に掲げてから見ると、応の字の点が一つ落ちていた。折角高いところに上げたのを又おろさせるのも気の毒だし、といって登って行って書き足すのも大変なので、何かよい工夫はないかと、見ている人々も心配していると、やがて空海は、筆に墨を含ませて、額に向かってそれを投げつけると、ちょうど好いところへ飛んで行って、うまく点がついたという話もあります。これを弘法の投げ筆といいます。

まだ此の外にも、空に字を書くと、はっきりと現れたとか、水の上で書くと、字は消えないで流れて行ったとかというような不思議な話もいろいろありますが、これらの中には、書がいかにもうまかったので、後の世の人がますます尊くしようと思って作った話もあるでしょう。

学校を起す

空海はまた、京都に綜芸種智院という学校を起こして、広く一般の子弟に学問を教えました。其の頃、京都には貴族の子弟の学ぶ官立の大学はあったが、身分の低い者には入学を許されませんでしたので、いかに学問が好きでも進んで勉強することが出来なくて困っていました。

ところが、空海のこの学校は、身分の如何に拘らず、僧侶でも俗人でも、志のある者はどしどし入学を許したので、時の人々は大いに喜んだということです。ここで教えたものは、主として仏教ですが、また漢文学にも及んだのでありました。

いろは歌

斯ういうように空海は学問も深く、書も上手でありましたので、今も毎日用いているこの平仮名も作ったのは彼だといわれていますが、それが本当であるかどうかはともかく、これを「いろは歌」にしたの

は空海であったのでしょうか。

伝えるところに依ると、彼が高野山に金剛峰寺を造る時に、一心に働いている大工や杣(きこり)にも、仏教の尊い教えを知らせてやろうと、涅槃教というお経の中にある有名な文句の意味を、
「色は匂へど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ、有為の奥山けふ越えて、浅き夢見し酔ひもせず」
と今様体という四句の歌にして歌わせたものだということです。ここで其の47文字が、悉く別の文字から出来ていて、仮名を習うのに都合が良かったので、後には此の歌を其のまま手本などにも用いているのです。

空海の公益事業

空海は斯くもいろいろの方面にすぐれていましたが、更にまた仏教を弘めるために諸国を巡った間に、行く先々で道路を開き、橋を架け、渡舟を備えて交通の便を計ったり、池を堀り溝を穿って、農業をますます盛んにするようにしました。

中でも殊に聞こえるのは、大和の久米寺の附近に益田池という大きな池を掘って、多くの水田を開いた事と、彼の生国の讃岐(香川県)で、土地の者が萬農池という大きな池の堤を修築しようとしたが、数年かかっても出来ないという話を聞いて、国に帰り、池の附近に小さな小屋を作って、専ら其の工事を監督しながら、三年の間そこに留まって、ついにその堤を完全に出来上がらせて、一万町歩の水田を開いたという事です。

斯うして空海は、桓武天皇から五代の間、上下の深い尊信を得ていたのですが、ついに仁明天皇の承和2年3月に、62歳を以って高野山で亡くなりました。

後に、第60代醍醐天皇の御代に弘法大師の諡を賜りましたが、その一生の間に、世の為、人の為に尽くした事がいかにも多かったので、その当時から今日に至るまでも非常に尊敬され、大師号を賜った高僧は外にも多くあるのに、大師といえば弘法大師に限るようになら思われています。

「大師は弘法に奪われ、太閤は秀吉に奪わる」
という諺があるのも、それが為であります。

(第28話 伝教大師と弘法大師 終わり。 次は一旦前頁に戻り、

第29話 平安時代初期の文化 へ)